

令和4年11月、愛知審査にて七段に合格しました。ご指導いただいております先生方、稽古をつけていただいている皆様に心より御礼申し上げます。

この度是非と筆を執らせていただきましたが、体験を言葉にするのは難しく、まだまだ理解が浅いことを痛感しています。要領を得ない投稿かもしれませんが、審査まで意識していたと今思い出すことを2点書きたいと思います。

ひとつは、稽古において打たれることを嫌がらないということです。打たれると思った瞬間、下がったり、姿勢を崩したり、はぐらかして打たれないようにするのではなく、むしろ打たれてしまった方が相手をよく見ることに繋がると教えていただいたことがあります。どうしても「打たれる＝負ける」という感覚があるため、負けが続いていると心が晴れないときもありましたが、崩れないことを重視して長らく取り組んでいると気付きや変化が多くありました。構えが安定し、相手の意図が伝わってくるようになり、前よりも機会を捉えることができるようになった気がします。

もうひとつは、審査の際ですが、指導者になったつもりで臨んだことです。パーセンテージを踏まえると、合格者は1組に1人いるかいないかです。互いに打った打たれた横並びでは合格の票数が得られず、目立つことが大切だと考えました。例えば、両者拮抗する試合を1分30秒切り取って見ただけでは勝者を予測するのは難しいですが、高段の先生が掛かり手に面を打たせている姿は、現象としては打たれていても掛かり手を動かしているように見えます。立合いの相手は自分と似た、もしくはそれ以上の剣歴を持つ方なので、こちらが指導者などと言っては失礼で申し訳ありませんが、打たれても指導者の格が下がりはないから堂々としていようと思うことで運良く流れをつかめたと感じています。

以上が審査を振り返って思い出すことですが、剣道に限らず様々な場面で多くの方から声をかけていただいたことが自分の力になっていると感じています。それに報いるためにも努力を重ねていきたいと思いますので、皆様、今後ともよろしく願います。

令和4年12月 水野正太郎